

令和4年度第4回仙台市協働まちづくり推進委員会 議事録

- 日 時：令和5年2月2日（木） 10:00～12:00
- 場 所：仙台市市民活動サポートセンター 市民活動シアター
- 出席委員：高浦康有委員長、佐々木綾子副委員長、岩間友希委員、
小林幸司委員、佐伯恵子委員、庄子康一委員、高橋由佳委員
傳野貞雄委員、春由美委員
- 欠席委員：石田祐委員、加藤隆委員
- 事務局：市民局長、市民局次長、市民活躍推進部長、地域政策課長、
市民活動サポートセンター長、市民活動推進係長、連携推進係長、他担当職員

○次第

1 開会

2 議事

- (1) 若者のまちづくりへの参加等に関する実態把握調査について
- (2) 若者が活躍するまちづくり事業の今後の展開について

3 その他

4 閉会

○会議内容

1 開会

[事務局（市民活動推進係長）]

ただいまから、令和4年度第4回仙台市協働まちづくり推進委員会を開催いたします。議事に入ります前に、当委員会の定足数を確認させていただきます。本日は、石田委員と加藤委員から欠席のご連絡をいただいております。また佐々木副委員長から、少し遅れてご出席されるとのご連絡をいただいております。現時点で 11名中8名のご出席をいただいておりまして、出席が過半数を超えておりますので、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例施行規則第4条第2項の規定に基づき、会議は成立いたしますことをご報告申し上げます。

それでは、ここからの議事進行は高浦委員長にお願いいたします。

[高浦委員長]

皆さん、おはようございます。雪が降って足元が悪い中、お集まりいただきありがとうございます。本日もよろしくお願ひいたします。

まず、今回の議事録署名人については、五十音順により、小林委員にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

2 議事

(1) 若者のまちづくりへの参加等に関する実態把握調査について

[高浦委員長]

それでは、議事の一つ目「若者のまちづくりへの参加等に関する実態把握調査について」です。昨年10月の委員会では、速報版について事務局から説明がありました。お手元の意識調査報告書（案）では、アンケート結果のみならず、ワークショップなどの記載が追加されています。青葉の風テラスで、大学生を中心に二十数人に集まつていただき、本当に楽しそうなワークショップを開催されたようです。こちらを含めまして、事務局からご説明をいただきたいと思います。

今回は、案としては最終版になっていますが、今日の議論を踏まえて最終的に調整し、完成版を年度末に市のホームページで公表することです。冊子としてどのあたりまで配布するといいのか。例えば、町内会で活動している高齢の方まで見ていただくためには、やはり紙の方がいいのか。そのあたりも、皆さんのご意見を頂戴できればと思っております。

多様な世代が参画してのまちづくりかと思いますが、特にユース世代をどう巻き込んでいくのかというところで、この調査結果を踏まえた今後の市の施策の展開については、議事（2）の方で皆さんのご意見を頂戴したいと思います。

それでは、事務局から説明をお願いします。

[事務局（市民活動推進係長）]

それでは議事（1）「若者のまちづくりへの参加等に関する実態把握調査について」、お手元の資料1により、報告書の最終案についてご説明いたします。

初めに、目次をご覧ください。報告書の構成といたしましては、6ページからアンケート調査について、34ページからワークショップについて、45ページから関係団体ヒアリングについて記載しております。これら三つの調査の総括を49ページから記載し、巻末にはアンケートの調査票などを付録として掲載しております。

では、まず、アンケート調査についてご説明いたします。前回の委員会では、速報版をご覧いただきましたが、そこで皆様からいただいたご意見をもとに、大きく分けて5点の修正を加えております。

まず、10 ページをご覧ください。セグメントの名称について、「まちづくり活動に興味、関心がない」という方々を速報版では「関心喪失層」、「無関心層」としておりましたが、前回の委員会でご指摘をいただきましたので、「潜在層（経験あり）」、「潜在層（経験なし）」と改めています。

2 点目は、13 ページをご覧ください。関心のある分野について、前回の委員会でご意見をいただきまして、年代別の分析に加えてセグメント毎の分析を追加しております。

3 点目は、15 ページをご覧ください。一部の設問について、アンケートの内容を深掘りするため、当課で実施しております「仙台まちづくり若者ラボ」及び「ユースチャレンジ！コラボプロジェクト」の参加者を対象に、追加でアンケートを行いました。その結果を「若者活躍事業参加者の声」として記載しております。15 ページのほか、16 ページ、18 ページ、21 ページにも同様に記載いたしました。

4 点目は 32 ページをご覧ください。質問 14 の自由記述について、194 件ものご回答いただきましたので、その内容について、高浦委員長に分析をお願いし、その結果を掲載しております。また、その他の選択肢での自由記述が多かった質問 11、質問 12 につきましても、高浦委員長に分析いただいた結果を 22 ページと 26 ページに掲載しております。

最後、5 点目といたしましては、選択肢に番号を振るなどの全体の体裁を整える修正を行ってございます。アンケートの報告に関する前回からの修正点のご説明は以上でございます。

続きまして、ワークショップについてご説明いたします。34 ページをご覧ください。ワークショップは、「U39 まち活トーク」と題しまして、11 月 30 日に国際センター駅 2 階の青葉の風テラスにて開催いたしました。当日は、25 人の方にご参加いただき、活発な話し合いが行われました。若者たちがまちづくり活動に対して抱いているイメージや考え方を聞かせていただくため、参加者の皆様には、6 グループに分かれさせていただき、まちづくり活動を始める若者を主人公とした物語を、グループごとに参加者同士で話し合いながら創作していただきました。34 ページの下部に参加者の属性を記載しておりますが、委員の皆様に周知のご協力をいただいたことで、特に 20 歳から 24 歳の大学生の方に多くご参加いただきました。

次に 35 ページをご覧ください。ワークショップの流れを記載しております。今回工夫した点は、参加者が意見を出しやすいようにするために、BGM を流したり、スライドや印刷物をポップなデザインで統一したりするなど、カジュアルな雰囲気づくりを心がけました。こちらで設定した 6 人の主人公をグループ毎に割り振る際も、カードを引いて決めるなど、ゲーム感覚で取り組んでいただけたようになります。アイスブレイクとして、参加者全員で、それぞれがイメージする主人公の絵を描いていただきましたが、緊張をほぐすだけでなく、参加者同士でイメージを共有しやすくなりました。ワークショップで使用したスライドや、会場の様子がわかる写真を、59 ページ以降に付録として掲載しておりますので、ご覧いただければと思います。

各グループで創作した物語は、36 ページから 41 ページに掲載しております。グループの発表をベースとして記載しておりますが、話し合いの過程で出た内容を補足しております。枠囲みのところに書いてある設定は参加者にカードで引いていただいたもので、その設定を元に参加者に描いていただいた絵をグループの中で一つ選んでいただき、掲載しております。

次に、42 ページをご覧ください。各グループで創作した物語の共通点や、傾向を分析してまとめております。特に、人とのつながりが活動を始める動機であったり、継続のモチベーションになったりと、どのグループでもキーワードとなっている傾向がございました。その他、共通点や傾向を視覚的にわかりやすくしたものが 44 ページのプロセスマッピングでございます。前回の委員会において、佐々木副委員長から AISAS^{*}についてのお話がありましたので、まちづくり活動に至るまでのプロセスをこのような形でまとめさせていただきました。

続きまして、関係団体ヒアリングについてご説明いたします。45 ページをご覧ください。アンケート調査の結果を踏まえ、一部の質問項目について、実際に多くの若者とともに活動している二つの団体に、活動において工夫していることなどを伺い、アンケート調査の深掘りを行いました。

46 ページをご覧ください。アンケート調査の質問 6 「まちづくり活動への参加に期待すること」についてのヒアリング結果でございます。アンケートにおいては、「社会に貢献できる」、「人とのつながりを増やせる」、「困っている人や誰かの力になれる」、「楽しい時間を過ごせる」などが上位となりましたが、ヒアリングした 2 団体においても、そうした期待にこたえ

る工夫が見られました。例えば、「人とのつながりを増やせる」について注目してみると、外国人の子供サポートの会では、「学生同士の横のつながりによって支え合いができる」と回答しており、ONE TOHOKU HUB では、「学生が社会人と関わることでキャリアを広げることができる」と回答しています。前者では、人とのつながりが活動の継続に、後者では人とのつながりが自分の成長につながるものと思われます。

次に、47 ページをご覧ください。アンケート調査の質問 11 「まちづくり活動に参加することへの不安、参加の妨げ」についてのヒアリングの結果です。アンケートにおいては、前回の委員会でもご説明した通り、わからないことに対する不安が大きいという結果となりましたが、ヒアリングした 2 団体とも、若者のそうした不安を払拭すべく、丁寧に対応していることが伺えました。

続いて 48 ページをご覧ください。アンケート調査の質問 12 「まちづくり活動に参加する若者が増えるために重要なこと」に関するヒアリングです。どちらの団体も、アンケートから重要なと分かった「気軽さ」を重視していますが、特に ONE TOHOKU HUB では、それに加えて、学生へのアプローチを重視していることが伺えました。

続きまして、49 ページをご覧ください。本調査の総括でございます。今回の調査の主な目的は、今期、これまでの委員会でご説明して参りました通り、まちづくりに興味、関心があるものの、まだ活動に踏み出していない若者をどのように活動へと後押ししていくべきのか、そのポイントを探ることでございました。アンケート調査、ワークショップ、関係団体ヒアリングの三つの調査から見えてきたそのポイントを、50 ページと 51 ページにまとめております。

50 ページをご覧ください。今回の調査から、若者が活動に参加する場合に期待すること、言い換えれば参加する動機は「貢献」、「楽しさ」、「人とつながれる」、「自分の成長」であることがわかりました。参加への妨げの大部分は「わからないことへの不安」であり、「活動にどれくらい時間がとられるのか」、「自分に何ができるのか」、「どのような団体があるのか」などの情報が具体的にイメージできれば、参加へのハードルが下がることがわかりました。そこに、「事前申し込みなしで、短時間で体験できる」ことや、「個人で参加できる」といった「気軽さ」が加わることも重要であるとわかりました。

51 ページをご覧ください。以前の委員会でも、「若者は情報を取りに来ていない」というご意見をいたしましたが、若者に対しては、「情報を発信する」というよりも、「情報を届ける」ことが重要であると考え、(3)として、「情報の届け方」と記載いたしました。若者に情報を届けるためには、50 ページでご説明差し上げたポイントを押さえた上での工夫が必要となります。若者は、SNS を情報収集、情報発信の両面で活用しております。アンケートにおいても、市に SNS の活用を求めるご意見がございましたし、ワークショップにおいても、ほとんどのグループで SNS の話題が出ておりました。「わからない不安」を「期待と安心」に変えてもらうためには、事業内容をイメージしやすい動画や画像などを交えながら広報する必要があり、そのために、SNS は効果的なツールです。また、これも委員会でいただいたご意見でございますが、実際に活動している人や、学校の先生、職場などから勧められると、情報が届きやすいことが本調査からもわかりました。若者と一口に言っても、大学生なのか、社会人なのか、子育て世代なのか、世代によって関心のある分野や使用している SNS も異なることがわかりました。ターゲットに応じて届ける情報やツールを工夫する必要がございます。

ここまでが報告書の本編でございまして、52 ページから付録として、アンケートの調査票を、59 ページからワークショップで用いたスライドを、62 ページにはワークショップの様子を、63 ページからは、ワークショップの参加者アンケートを掲載しております。

簡単ではございますが、報告書の最終案のご報告は以上でございます。今回の調査の結果を踏まえた今後の事業展開につきましては、議事(2)にてご説明させていただきます。

議事(1)について、事務局からの説明は以上でございます。

※ AISAS (アイサス) …Attention (認知) · Interest (興味関心) · Search (検索) · Action (行動) · Share (共有) の頭文字を組み合わせて作られた、電通が商標登録した用語。消費者が商品を認知してから購入するまでのモデル。

[高浦委員長]

ボリュームのある報告書ですね。アンケート結果以外にも、ワークショップ、関係団体への

ヒアリングの結果など掲載いただいたて、この短時間で全部目を通すというのは、皆さん大変かと思います。いろいろと議論を深めながら、理解を広げていければというふうに思っておりまます。とりわけ、最後の方でおまとめいただいている絵など拝見しますと、気軽さの演出とか敷居を低くして不安を払拭するとか、SNSなど交流の機会を作っていくとか、若者に、ユース世代に寄り添ったアプローチが大事だと改めて確認できた気がいたします。多少でも持っているかも知れない関心を後押ししてあげるということですね。

議論の口火を切ることで、1点、私から。報告書の中段あたり、ワークショップに参加された方たちに書いていたイラストもあり、とても楽しかったのかと思います。こうした物語分析は、ペルソナという架空の人格を作つて課題検討していくというアプローチかと思います。若い人だけではなく、子育て世代とか、外国籍の人とか、いろいろな世代を設定されていますが、参加した人は物語を作つてどういう気付きを得たのかという点では、いかがでしょうか。こうしたワークショップに参加して、「新しいことを発見しました」とか、仙台市に対して、「こういう世代が参画するような、こういうプロジェクトがいいのではないか」という提言が聞こえてきたとか、そういうものはないでしょうか。せっかく、こんなに成果が上がっているので、次のステップに生かすことができたらいいなと思っていますが、いかがでしょうか。

[事務局（市民活動推進係長）]

参加者のアンケート結果を63ページ以降に掲載させていただいておりまして、書いていただいた通りの内容で、それぞれのコメントを記載しております。募集の段階で、このワークショップをまちづくり活動に参加したきっかけにもしていただきたいという狙いもございましたので、基本的には、参加経験がない方、これから参加してみたい方という方をターゲットにしていたところでございます。

大学の先生に勧められたり、知人に勧められたりしてご参加いただいた方が多かったようで、初対面の方と話すことに最初は少しとまどいもあったようではございますが、ワークショップが進んでいくにつれて意見も活発に出され、こうした場でいろいろな方とお話をできたことが楽しかったというようなご意見もございましたし、またこういったイベントがあれば参加したいというご意見も頂戴しましたので、何かこういった気軽に参加できるようなきっかけ、体験できるような機会を今後も作つていければと思っておるところでございます。

[高浦委員長]

笑顔が絶えない感じで、とても楽しく参加できたとか、まちづくりを考える良いきっかけになったといったことが感想から伺えますね。外国籍の人の立場で考えた場合の課題とか、子育て世代の人がまちづくりに関わるときの課題なども、若者の視点で考えられたことがあるのではないかと思います。そうすると、ユース世代からの支援の提言とか提案とかを拾い出せる機会として、今後深掘りしていくといった狙いがあつてもいいかもしれませんね。その時点で既にまちづくりにユース世代に関わってもらっていることになると思います。もちろん、カチッとしたものとしては、SDGsアワードとか、ユースチャレンジとか、若者ラボとか、この後、議題2で紹介いただくようなものを、制度として作り込んでいただいていると思いますが、こういうワークショップも一つのきっかけになるのではないかと思いました。

[小林委員]

報告書の作成、すごく大変だったと思います。お疲れ様でした。素晴らしいものができ上がっているかと思います。

前も少しお話したかもしませんが、もともと高い問題意識を持って活動する人は、おそらく何のアプローチがなくても自分から動くと思います。だから、そうではない人たちがどう活動していくか、どのようにまちづくりに関わるかという視点だと思いますが、この結果を見る限り、意外と答えは、当たり前というか、新発見というよりは、やはりこうしたことだったなと思いました。まず、気軽に参加するきっかけづくりと、参加した人がいかに楽しいと感じるか、感じさせるか、その辺がやはり鍵なのかなと思います。

ワークショップの参加者アンケートを見ても、先生に勧められたりして参加している人が一番多いのですけれども、それでも参加した結果は満足されていますよね。だから、参加するきっかけを作ることができれば、いろいろなことに何らかの興味は持てると思います。

アンケート調査の結果も、参加できない理由とか、妨げが何かというところを見ると、時間がとられるとか、あと活動団体がわからないとか、自分が何をしていいのかわからないとか、その中身って割と当たり前のこと、それを完全に取り除くことはできませんし、みんなが同じように感じるようなもので、誰もが納得することだと思います。しかし、そこに何か少し気軽に参加できるきっかけとか、背中を押してくれる人がいて、実際に参加すれば、多分そういう不安も解消するのかと思います。だから、参加できない理由は、何となく後付けの、少し言い訳っぽい理由で、上げていけばいくらでも上げられるものだと思います。だから、一度でも参加して楽しいとか、こんなことができるということを気付かせてあげて、今後は、まちづくりに参加する時間を優先して作りたいと思わせられるか。そこがやっぱり鍵なのかと、このアンケートを見て思いました。

[高浦委員長]

背中をポンと押してあげるような取り組みが必要だということですね。そういうところがより浮き彫りになったというご感想かと思います。具体的にどういう政策ができるというのは、ぜひ議事（2）の方でご意見いただければと思っております。

[庄子委員]

私も全部目を通して来ましたが、前回の速報版からさらに修正されて、非常に見やすく、わかりやすいと率直に感じました。私もまちづくりに関わってからは浅いので、長く関わっている団体の方からすると当たり前と感じるかもしれません、これからやろうとしている人から見ると、キーワードとして非常にわかりやすくまとめられていると思います。特に、最後のまとめ、総括の部分も、わかりやすいキーワードが載っているので、今後、活動に役立てられたと感じました。

強いて言えば、高浦委員長のデータの掲載の仕方が、パッと見た時に少しわかりづらいので、図の見方について少し補足があるとわかりやすいのかと思います。

荒町の方でも、4月に東北学院大学の五橋キャンパスが開設されるので、ちょうど子まもりプロジェクト、防犯のプロジェクトでも、今年の6月ぐらいに学生とのディスカッションを考えています。その中でも、今日のこの結果を踏まえたアプローチの仕方等をやってみようかなということを描けるような報告書だったので、非常に参考になりました。

[高浦委員長]

荒町や連坊の商店街と東北学院大のコラボレーションですね。若い人達がまちづくりに参加するきっかけについて、いろいろな種がいろいろなところで撒かれているという気がいたします。

ご指摘いただいた私の分析ですが、見方を書かずに、結果と解釈だけを並べてしまっていたので、わかりにくかったかもしれません。例えば 22 ページは、分析ソフトウェアではじき出したものを載せています。たくさん出てくる言葉は円が大きくなり、そして、言葉と言葉がつながって同じ文の中で出てくると線が引かれて、似た者同士で色をつけています。そのキーワードから、点線の円の囲み毎に、解釈を加えているというところです。自由記述の分析について、どこから手をつけていいのか、市で悩まれていたようでしたので、お助けしたつもりだったのですけども、かえって少しわかりにくくなってしまっているかもしれません。

また、23 ページの矢印の後に、分析を踏まえて、私なりに、こうしたことをしていった方がいいのではないかという意見を書かせていただきました。地域に住んでいる留学生とかを若い外国人の方も包摂するような取り組みがあつたらいいのではないかとか。少し広げて解釈しているところもあったりいたします。

[庄子委員]

あと、「若者活躍事業参加者の声」というのが載っているのが非常にいいなと思いました。

アンケートだけやって、数値だけだとスルーしてしまうところが、最後に、この「若者活躍事業参加者の声」が載っていることで、気持ちが伝わると感じました。

[高浦委員長]

21 ページなどの PLUS のところですね。私もこれは本当にいい工夫だと思いました。この報告書の活用の仕方という点でも、市のホームページに上げるのみならず、こうした方がいいのではないかとか、そういうご提案でも結構かと思いますし、次にワークショップを開くとしたら、こういうテーマ設定がいいのではないかとか、みなさんご意見いかがでしょうか。

[佐々木副委員長]

この報告書と、今後の展開についても軽く触れさせていただきたいと思います。

初めに、報告書を私も読ませていただきまして、本当にすばらしいと思っています。これだけまとめていただいて、やはり現状分析がしっかりできたかと思います。いろいろな仮説を立てながらも、現実にこう感じていらっしゃるというところを皆さんと共有できるということは、報告書の意義があると、とても思いました。

例えば 50 ページですが、「楽しさ×つながり×成長×貢献」という言葉がございまして、これらのキーワードは大切だろうとは以前から思っていましたが、実際にこういった四つのポイントが大切だという記述を見て、私自身も改めて認識いたしました。今後の展開ということを考えたときに、「楽しさ×つながり×成長×貢献」というのはビックワードなのかと思っていまして、若い方々の「楽しさ」は具体的にどんなことを楽しく感じてらっしゃるのか。「貢献」とはどういったところで貢献できたと充実感を感じられるのだろうか。「人とのつながり」も、おそらく世代によってつながるイメージやつながり方が異なっていて、若者のそれぞれの思いがあるかと思いますので、そういったところをさらに深掘りしていくと、次の施策が見えてくるかと思っております。

また、51 ページの（3）「情報の届け方」について、先ほど事務局の報告で「発信」ではなく「届け方」というお話をされて、なるほどと私も学ばせていただきました。ただ発信するだけでは、どうしても届かないというところが大きな課題なのかと思います。

わからない不安を払拭という点でも、いくつかのタッチポイントがあるのではないかと思っておりました。例えば情報を何かで発信する際、それを見た方が興味関心を持ったときに、次にアクセスするという段階にもわからない不安という根底的な心理状況があって、その不安が払拭されて、体験に行ってみようと思う段階にもまたわからない不安があり、ここに何か小さなポイントがあると思います。一連の流れで施策を考え、一つ一つの人の心理状況の不安を丁寧に取り払っていく。それが、具体的な、今後の展開にいかしていただくポイントにしていただけるといいのかなというふうに思いました。

[岩間委員]

こんなに丁寧にまとめてくださっているので、ここをこう直した方がいいというのは思いつかないというか、よくまとまってわかりやすいというのが、まず拝見した感想です。

そのうえで、この報告書を一番読むのは誰なのかと思いました。今まちづくり活動を実践されている方は、町内会の方とか商店街の方とか、みなさん本当に悩んでいるので、例えば、その方々の目線に立つなら、先ほど庄子委員がおっしゃったような、グラフの見方をもう少しわかりやすく補足をしてあげるというのはすごく大事だと思いますし、総括も、表現をこれから活動に向けた示唆のようなものにすると、忙しい町内会の方とか、目次をさっと見て、総括をさっと見て、ポイントだけ見て、興味があったら調査の概要も見ていただけるのかなと考えていました。

ワークショップの結果も大変興味深くて、少し思ったことがあるので、それは議事（2）の時にお話ししようかと思います。

[高浦委員長]

実際に活動している団体、町内会等に向けて、こうした方がいいという何か提言のようなものを盛り込めるといいのではないかということですね。仙台市として活動への一歩を後押ししさ

れたいという思いが伝わってきていいのですけれども。その団体にとってのインプリケーション（含意）というところで、何か示唆があるといいかもしれません。

[小林委員]

仙台市の方で、どのくらい印刷してどこに配布するという計画があるのであれば、それを否定するわけではないですが、自分たちが活用すると考えたときには、やはりネットとか Web 上がベースの方がいいと思っています。特に、若い人であれば何か情報を取るのには、ネット上だと思うので。しかも、ネット上に置いておけば、後から何か改善点があつたりとか追加で何か調べたりしてどんどん追加していくこともできます。

ありがとうございます、時々、厚い報告書が 10 冊、20 冊と送られてくることもあるのですが、本当に紙の無駄だと思います。もちろん、必要なところに紙で提供するのはいいと思いますが、無駄なところへのばらまきにならないように、Web 上で活用した方が、汎用性があると思います。

[高浦委員長]

基本はホームページに上げて、学都仙台コンソーシアムの大学等に対してデータでお送りされるということで、あまり紙にはしないということを伺っていましたが、事務局いかがでしょうか。

[事務局（市民活動推進係長）]

今、高浦委員長からもご説明いただきました通り、まず仙台市のホームページで公開させていただきたいと思っております。もしご要望があれば、例えば委員の皆様の中で、紙で欲しいというご要望があれば、もちろんお送りさせていただきますが、若い方にも見ていただきたいですし、広く情報を届けたいというところもございますので、まずは Web を中心にと思っております。紙ベースでも、大学の先生で少しつながりがあるような方にお送りしたりとかということは考えてございますが、もしその他皆様からご提案などございましたら、お伺いできればと思っております。

[高浦委員長]

ぜひ Web で上げていただく際も、サマリーがあるとよろしいかと思います。よく企業のプレスリリースとかでありますけども、トップに結論が来るという見せ方ですね。今回終わりの方できれいにまとめていただいているものの要約のようなものを最初に出していただくと、確認しやすいと思います。ワークショップの様子も、報告書の PDF の中までいかなくとも、Web ページ上で写真があったりすると、目を引きますし、賑やかに実施されたことが伝わると思います。ビジュアルに勝るものはないかなと思いました。テーブルを囲んでいる写真とかいいですね。そうした工夫をいただけたとありがたいかなと思いました。

町内会や団体に対しての、具体的にこういうアクションがいいという提案については、この調査報告から少しジャンプしなければならないので、基本は仙台市の内部として今後どうしたらいいかといったことの資料かと思っています。とりあえず今回はこのあたりの結論で、仙台市がどう動いていくべきか認識を深めるという、そのための素材としての位置付けでしょうか。今後、まちづくり団体に対してのメッセージとしては、また別の機会を通じて、メッセージ発信できるといいかなと思っております。

[佐伯委員]

ホームページ掲載は、今の流れではわかるのですけれども、実際どのくらいの方が見られているのかと思っています。載っているということ自体を何かの形で発信しなければ、そのページにたどり着かないのではないかと思うので、その工夫として、例えば町内会でしたら、こういうものがあるということを連合町内会の研修等でお知らせいただくとか、ホームページにたどり着くための発信も必要ではないかと思います。

[事務局（市民活動推進係長）]

おっしゃる通りだと思いますので、関係部署と相談しながら、届きやすい方法を考えたいと思います。

[高浦委員長]

市政だよりには載せられないのでしょうか。多少スペースをいただいて、概要だけでも見せられるといいなと思いました。詳しく知りたい方はホームページでご覧いただくというのもあると思います。

[事務局（市民活躍推進部長）]

市政だよりは、多くの市民の皆様に見ていただく、大変有用なツールだと思っております。一方で、掲載したい情報が山盛りになっておりまして、その中で、こういったものが載っていますということの優先順位というのがどのくらいなのかというところも含めて、広報課には確認してみますが、なかなか厳しいかもしれません。また今、ご指摘いただきましたように、どこに載っているかが広く知られるように、何かの機会に知らしめていくということは力を入れていきたいと思っております。

[春委員]

どちらかというと、私は活用させていただく方の身になって読ませていただきました。アンケートを集計いただいたて、なおかつ、この「若者活躍事業参加者の声」なども入れていただきたいので、非常にわかりやすいものでした。ワークショップの方で、アンケートの内容が具体化してきたかと思います。ワークショップの参加者が、ストーリーの中に、自分と置き換えていけるような印象を受けました。架空とは言うものの、自分の意見を入れていただいて、自分が参加するツールとしているのかと思いながら見させていただいて、すごく実際の声に近いものができ上がったと思います。

私としては、若者というキーワードでの意識調査ではありますが、受け皿となる、企画運営、ボランティアを一緒にする側にも、若者が考えていることを意識していただきたいなど強く感じるところです。当方の事業でも、若者の方々にどうやって地域活動やボランティアに参加していただくかということをテーマにさせていただいたときに、まだまだボランティアの受け手側の意識がそこまで追いついていないという面がございます。特に、「楽しさ」というようなところが、運営側と若者との間で、なかなかうまくマッチしません。基本的には、何をするかというのも重要だと思いますが、まずは、一緒に活動していく場をどう作っていくかというところが、きっかけになるのかと思っています。「人とつながる」、「貢献」、「自分の成長」というものは後付けで出てくるものなのかと思うので、やはり自分が楽しみながら活動しているということが伝わるような企画や、PR・発信の仕方が必要なのかと感じたところです。21ページの参加者の声の中にもSNSを見て活動をイメージできるとワクワクするとあります。SNSで動画等を配信していくことで、具体的にどんなことをするのかという不安は払拭できるのかと思います。動画を気軽に視聴できる世の中になったので、イメージしやすい情報の発信を高めていきたいと感じながら見させていただきました。

[高浦委員長]

「若者アワード」等の市の若者施策は動画配信をしているのでしょうか。

[事務局（連携推進係長）]

「仙台若者SDGsアワード」と「仙台まちづくり若者ラボ」では動画を撮っておりまして、ホームページでご覧いただけるようにしています。また、ラボの方は、全体のものからダイジェスト版まで、いろいろな角度から動画をアップしておりますので、若者にご覧いただけたと「わからない」の払拭につながっていくのではと考えております。

[高浦委員長]

そういう動画をさらに活用できるといいですね。新たに応募しようかという人たちが増えてくるといいなと思いました。

前回の委員会で、社協でも、ダンスなども含めていろいろな動画を作成されていると伺いましたが、そういう創作的活動だと、若い方も非常に前のめりになって良いと思いました。

[高橋委員]

すごく素晴らしい調査の内容だなと思っていますし、まとめるのは大変だったかと思います。お疲れ様でした。

皆さんのがおっしゃっているのと同じで、私も、せっかくこれだけ時間を割いて作られた報告書が、届くべき人にどう届けるかというところを、どのように設計していくのか。情報の届け方の整理を、きちんとロジックとしてやると、今後何か別のアンケート調査や若者のまちづくり事業にこのフレームとして活用できるのかというふうに思っていました。

また、その届け方とか見せ方というところでは、総括の部分のところに、例えばポンチ絵みたいなもの、イラストがあると、視覚的に見やすいのではないかと思います。予算の問題もあるかもしれません。そういったことが得意な学生さんに書いていただくとか、もしかしたら文字だけで、なかなか視覚的に見にくいかもしれないで、そういうものがあるといいのかなと少し思いました。

私自身も、郡市長の YouTube や Twitter など、市の情報をいろいろ見てますが、SNS や市政よりも含めて、ありとあらゆるものを駆使した方がいいのかと思います。この委員会だけに留めるのではなく、紙ベースも Web も含めて、予算がかからない SNS であれば特に、できる限りの発信をしていくことが重要なのかと思いました。

[高浦委員長]

見せ方というところで、さらにレベルアップというところは、きっと市民協働推進課のユース世代の職員の皆さんのが頑張っていただけるのではないかと思います。ただ、これでも十分にわかりやすく図式化されているのではないかと思います。

また、いろいろな媒体を通じて発信をというご意見ですね。こうした調査事に関心のある大学もそうでしょうし、これは中間支援・NPO 支援の団体等、仙台市外の団体でもいいかもしれません、各市の市民活動サポートセンターとか、そういうところに送って、何か新しいつながりが出てきたらそれはそれでいいと思います。少し検討の余地があるかもしれません。

[傳野委員]

いろいろな方法があると思いますけれども、私の立場から申し上げますと、毎日、朝と晩には必ず見るようしているので、一番安心なのはショートメールでいただくことです。季節の言葉も何もいりませんから、要件のみいただければ結構です。市連合町内会の事務局からは、大切な要件は文書でいただきますが、直接電話がくることもあります。電話をいただいたときに手元にメモがあるとは限りませんので、できれば、ショートメールを多用していただいた方が助かります。今はスマホを持たない人はほとんどいませんし、すぐに開いて確認できますし、出した方の立場からしても発信した記録が残りますし、郵送料の節約にもなりますし。私は、市政だけではなく、時間に余裕のないときは鞄に入れて、あとから時間が空いた時に必ず見るようになっていますが、みなさんが同じように見ているかは分かりませんので、紙を少なくする方がよいと思います。

[高浦委員長]

本当に貴重なご提案だと思います。ショートメール、また、メールも同様でしょうか。スマートフォンがこれだけ普及していますので、高齢の方もお使いの方が多いということですね。メールでのつながりというのは結構あるかと思いますので、それもあわせてご検討ください。

それでは、ここで5分ほど休憩といたします。

— 休憩 —

(2) 若者が活躍するまちづくり事業の今後の展開について

[高浦委員長]

議事に戻ります。

先ほどの報告書は案ということですので、今後、皆さんのご意見を反映できるところと反映を見送るところがあるかと思います。できるだけ改善させていただくとして、最終版は、もう一度皆さんにお集まりいただく機会が今年度はありませんので、市民協働推進課と私にご一任いただければというふうに思っております。よろしくご了承ください。

続きまして、議事（2）「若者が活躍するまちづくり事業の今後の展開について」ということで、施策の話になるかと思います。事務局から、よろしくお願ひします。

[事務局（連携推進係長）]

議事（2）「若者が活躍するまちづくり事業の今後の展開について」、ご説明させていただきます。右上に資料2と書かれておりますA4横の資料をご覧ください。まず、お配りしております資料の見方でございます。一番左側には、今回の報告書にございましたまちづくり活動への興味・関心や活動経験を踏まえましたセグメント分類のうち、「活動層」、「関心層」、「潜在層」のフェーズを矢印とともに記載し、その右側には市民協働推進課の事業をそのフェーズに合わせて記載しております。そしてさらにその右側には、事業の概要と今後の展開を記載しております。

まず、「仙台若者SDGsアワード」についてご説明します。こちらの事業は、社会課題の解決のために活動する若者団体の表彰や、若者団体同士の交流会などを開催するものでございます。また、若者団体と地元企業がコラボレーションして、社会課題の解決やSDGsの達成に寄与する活動の伴走支援も行っております。この事業の今後の展開は、一つ目として、先行して今年度から実施しておりますが、仙台市以外の団体も表彰対象に拡大いたしまして、団体同士の交流の機会を増やして参ります。二つ目として、表彰部門にエントリーいただきました若者団体を対象にセミナーを開催し、活動のPRスキルなどの向上を応援して参ります。三つ目として、今年度から仙台市外に表彰対象を広げたことを踏まえ、県内の自治体にも参画を呼びかけ、例えば団体の受賞枠を増やすなど、表彰の審査員として若者団体の活動に対するコメントをいただいて若者団体側にフィードバックする、そういう機会を充実させていきたいと考えております。これらの内容は、今回の調査結果における、若者が活動を継続していくために重要なと考えられる要素、つまり、「活動を通じた楽しさ」、「人とのつながり」、「自分の成長を感じられる機会」、「地域や社会貢献の実感」、そういう要素をより深化させられるよう取り組んでいく予定でございます。

続きまして、二つ目の「ユースチャレンジ！コラボプロジェクト（若者版市民協働事業提案制度）」についてご説明します。この事業は、身近なまちづくりに取り組む事業の提案を若者団体から募集し、市が負担金を交付するとともに、若者団体と市が協働で取り組むものでございます。今後の展開につきましては、一つ目として、若者団体と市の担当部署が、両者のみでいきなり協働の取り組みを実施することは難しい部分もございますことから、当課やまちづくり活動について豊富な経験を有するサポート団体が、その取り組みの伴走支援をさせていただきながら、若者団体の活動に対する不安の払拭に努めて参ります。次に、二つ目といたしまして、新年度向け事業の公募日程を前倒し、若者団体の事業の準備期間や実施期間を確保させていただきます。今年度までは事業を実施する年度に入ってから公募しておりましたが、令和5年度向け事業の公募につきましては、先月1月から公募を開始しております。また、この公募日程の前倒しによって、後述いたします「仙台まちづくり若者ラボ」のチームが、新年度に自分たちの考えたアイディアをアクションに移したいとなった場合にも切れ目なくつながるようにしたいと考えております。最後に、三つ目として、若者団体に提案いただき、採択された事業につきましては、審査のうえ、翌年度も引き続き活用できるように制度改革いたしまして、取り組み継続の支援をしていきたいと考えております。以上の内容につきましても、今回の調査結果において、若者の「わからない不安の払拭」が活動への後押しに重要であると考えられることから、不安を払拭することで若者が提案しやすい環境を作るとともに、その提案が継続的な活動になっていくよう伴走支援させていただきたいと考えております。

続きまして、「仙台まちづくり若者ラボ」についてご説明します。この事業は、まちづくりに関するテーマに沿って、ワークショップやフィールドワークを行い、その成果を発信することで、まちづくり活動を担う若者の育成につなげていくものでございます。今後の展開につきましては、一つ目として、昨年の本委員会におきましても、実際に活動した方々の声やハードルを低くすることの重要性についてご意見をいただきましたけれども、若者の本事業に対する「わからない不安の払拭」につなげるため、参加者を募集する際の広報チラシに実際の参加者の声を載せるなど、参加のハードルを下げられるように、今後工夫して参ります。二つ目として、本事業の卒業生や活躍中の若者団体、同世代の市職員との意見交換の機会を創出し、交流を促進するなど、若者の活動を後押しさせていただきたいと考えております。同世代の市職員との意見交換の機会につきましては、今年度から前倒して実施させていただいております。これらの内容につきましても、今回の調査結果において、「若者がまちづくり活動に参加する場合に期待するもの」としてあげられた「楽しさ」や、「人とのつながり」につながっていくものと考えております。

続きまして、今回の調査結果を踏まえた新規事業「体験機会の創出」についてご説明いたします。この事業は、試行的に実施するもので、名称や内容につきましては現在検討中でございますが、概要といたしましては、「マチカツ」に興味・関心があってもまだ活動に至っていない若者が、活動への一歩を踏み出すきっかけとして「マチカツ」を体験できる機会を創出するものでございます。今後の展開につきましては、一つ目として、若者が気軽に参加でき、実際の活動イメージを持つことができるような体験の機会を創出できる内容を検討して参ります。また、二つ目として、昨年の本委員会におきまして、若者は自分たちの考えが少しでも反映される機会や運営に携われることに非常にやりがいを感じるといったお話をいただきましたことを踏まえ、この事業を実施する際には、企画運営に若者にも参画いただき、より若者が成長できる機会を創出できるように工夫して参りたいと考えております。

最後に、情報の届け方の工夫についてご説明します。市の若者活躍施策などの情報を若者により効果的に周知広報し、その施策自体の認知度の向上や参加者の増加につなげていくものでございます。今後の展開につきましては、一つ目として、市の若者活躍事業を当課でなるべく集約して発信していくことで、若者に様々な施策を知っていただき、多様な機会を提供できるよう工夫して参ります。こちらも、昨年の本委員会におきまして、Twitter だと若者の反響が大きいといったお話をいただきましたことも踏まえ、例えば Twitter や Instagram などの市 SNS も活用し、ハッシュタグをつけて発信するなど、工夫して行って参りたいというふうに考えております。次に、二つ目として、今回の調査結果において、まちづくり活動に参加した直接的なきっかけとして、「学校や職場で参加する機会を与えられて」という回答の割合が高かったことを踏まえ、若者の身近な人たちへの周知広報も強化し、若者の参加の後押しにつなげていきたいと考えております。例えば、若者の親御さんなどにも情報が届きやすいように、市政だよりへの掲載を増やすことや、大学や職場などにもご負担にならない範囲で周知広報の協力をいただけないか相談をさせていただきながら進めて参りたいと考えております。三つ目として、今回の調査結果において、まちづくり活動に参加する若者が増えるために重要なものとして、「経費の支援」という回答の割合が、「事前申し込みなしで、短時間でも体験できる機会」の次に高かったことも踏まえまして、まちづくり活動に係る助成金情報のメール配信サービスなども活用することで、若者のわからない不安の払拭につなげていきたいと考えております。

以上で、「若者が活躍するまちづくり事業の今後の展開について」の説明を終わらせていただきます。

[高浦委員長]

今後の展開につきまして、皆さんのご意見、ご質問等頂戴できればと思います。

私が最初に。一つの事例ですが、今、仙台市の健康政策課で、歩数計アプリを使って、脱炭素ウォークイベントをしていらっしゃると思います。東京の会社の SPOBY というアプリを使っていますが、歩くことで健康になり、車に乗らないので CO₂ 抑制になって良いということで行われていますが、それをさらにまちづくりにも生かすというのも良いかと思っています。たくさん歩いたり自転車に乗ったりして、脱炭素のポイントを貯めて、それを協賛企業の支援金を以て、地域の団体の支援に回すことができるとか、地域にどういう団体があるか、メニューを

示してユーザーの人を選んでもらうといったものだと、若い人たちも割と参加しやすいかと思います。アプリのキャラクターのバリエーションを増やして、かわいいキャラクターを選べるとか、より若者向けに展開していただいてもいいかもしれません。その辺は提携企業との協議が必要かと思いますが、既に行われているイベントでも、少し工夫すればまちづくりに生かせるかと思います。特に体験機会の創出については、気軽に参加してもらえるような機会を、まずは個人レベルという点では、そういう工夫もあるかと思いました。

皆さん、こんなふうにすればいいのではないかといったご提案をいただけるといいかと思います。

[小林委員]

いろいろ考えられていて良いのではないかと思いますが、委員長からもお話をありましたけれども、やはり伝え方が大切だという気がします。我々も活動をしていてそうですが、どんなに中身を良くしても、なかなか伝えたい人に伝わらないと感じています。だから、どういうふうに伝えるのか、「届け方の工夫」のところでもありましたが、若者に伝えるには、やはり SNS 等をフル活用するしかないと思っています。自分は仕事として使うのでしたら Facebook が一番使いやすいと思っていますが、Facebook 利用者の年齢層が上がりつつあるので、本当に極端なこと言えば、担当の職員が YouTube とかのショート動画みたいなもので流行りの曲に合わせて踊りながらアピールするとか。そういうものがバズると非常に伝わるということがあるので、そういう少し思い切ったことをしないと難しいのかと思います。もちろんできる範囲で、ですけれども、その伝え方がやはり鍵になると思います。

あと、委員長のおっしゃった仙台市の歩数計を使った健康アプリは、自分も環境団体の人間なので良いなと思いました。ただ、自分でやろうとして難点だったのは、専用のアプリをダウンロードしなければならず、しかも歩数を計るのに位置情報をオンにしないといけない。個人的には、位置情報は常にオフにしているので、そういうものがあると、電池の減りが速くなるとかアプリが重くて嫌だとか、そのように思う方もいらっしゃると思うので、アプリを作るときは、スマホに対する負担が少ない方法を考えた方がいいのかなと思いました。

[高浦委員長]

プライバシーに関しては、意外と若い子はその辺りの無頓着なところがあるかと、普段学生と接していて感じています。友達同士で位置情報共有アプリとか持ったりして、「これから家出るの?」みたいなやりとりをしていることもあります。友達同士ならいいけれども、企業や行政に情報を取られたくないということもあるかもしれませんので、一定の配慮は必要ですね。

庄子委員は日頃からいろいろな仕掛けを商店街中心にされていらっしゃると思いますが、いかがでしょうか。

[庄子委員]

報告いただいた今後の展開については、非常に、工夫されていて良いと思いました。発信の仕方については、私も活動しながら、あらゆる方法で発信していかないとなかなか伝わらないと思っているので、できるだけ工夫をしています。特にキャッチフレーズが大事だと感じています。ネットでも YouTube でも、最初のフレーズで見るかどうかを決めるので、行政だとなかなか難しい部分もあるかもしれませんが、できる範囲で斬新なものだといいかと思います。最初のキャッチフレーズを 10 文字とか 15 文字でいかにキャッチャーなものにするか。さきほどのアンケート調査もそうですが、そこにたどり着くための、それを見たくなるようなキャッチフレーズが大事だと感じています。

委員長のお話しにありました SPOBY のアプリは、私もスマートフォンに入っています。私は歩くことが多いので、面白いかと思って入れてみました。「マチカツ」も、アプリ上で何かポイントが貯まるなど、やっている感が上がる仕組みがあると良いと思います。

[高浦委員長]

アバター的なものですね。メタバース空間でいろいろと動き回れるようにして、いろいろなキャラクターになることができるとか。今、JR 東日本で、秋葉原の駅に電車がついて、駅から降りて、街中に出て行くというメタバースがあつて、私もこの前ウサギのキャラクターに扮して歩き回ってみました。商店街のお店をのぞくというところまではまだ至っていないみたいですが、広告動画を見られるとか、オフ会があるとか、コーヒーを頼むと駅で受け取れるとか、そういうサービスに拡張されてきているようなので、JR と協議して、仙台駅メタバース空間とかはどうでしょう。

先日、市民局長がシティズンシップ教育とメタバースに関するテーマでシンポジウムに出られたと河北新報で拝見しました。若者は人と人とのつながりを求めていて、ワークショップのペルソナ分析もそうですが、メタバースをまちづくりに応用できるのではないかとお話をされたということで、こうしたオンラインの技術がこれからますます活用いただけると良いと思いました。

[高橋委員]

ちょうど私も同じようなことを考えていたところでした。体験機会の創出という点で、私も若者支援をしていく中で、サードプレイス、つまり若者が集まる居場所支援のようなことをしていると、はたして仙台市の象徴的なサードプレイスとはどこだろうかと考えておりました。人口 10 余万人の石巻市と異なり、人口 100 万人以上の仙台市では、マーケットが広いので、おそらくサードプレイスはいろいろな場所に点在しているのかと思い、そうなるとやはりアバターを使った Web で、若者が集まりやすいサードプレイスという象徴的な場を、仙台のなかにキャッチコピーをうまく使ってやっていくと、集まりやすいのかと思います。

今回お話しのあったワークショップは、やはり意識の高い人の参加が多いのではないかと思います。意識が高いわけではなく、コミュニケーションが脆弱な若者も世の中に多く潜んでいて、生活の中での困りごとをたくさん持っていると思います。その困りごとを把握しながら、様々な大人と一緒に課題解決をしていく場ということで、このサードプレイスというところはすごくキーになると思うので、「マチカツ」の中に、サードプレイスを、アバター、Web というキーワードで作っていただけだと、きっとこの情報の届け方の工夫にもつながっていくかと思いました。

少し蛇足になりますが、以前、北上町という人口 2,000 人くらいの町で、中学生以上にアンケートを取ったところ、やはり、若者と中高年、高齢者とではまちづくりの中の困りごとが全然違った結果となりました。高齢者だと農地の問題とか、介護とか。若い人は、居場所が欲しい、コンビニとかスタバがあったらいいとか。そういう例もあるので、若い人の困りごとを大人が支えるということも、一つ仕組みとしてあると良いかと思いました。

[高浦委員長]

普段の生活でこういうものがあると良いなという困りごとから何かまちづくりのヒントが見えてきそうですし、率直に、世代を超えていろいろな困りごとを共有していくという場があると良いと思います。サードプレイスとかでも実現されていくと面白いのかもしれません。メタバースのような技術ですと、なかなかお金がかかりそうで、予算取りが、かなり突出してしまう気がしますが、どこか提携してもらえる協賛企業があると良いですね。それこそ、市民協働で、そういう IT 企業が出てくると良いと思っております。

[佐伯委員]

前回の委員会で「マチカツ」という言葉を聞きましたが、この言葉を先程庄子委員がおっしゃったように、キャッチフレーズの中に使うのはどうでしょう。おそらく「マチカツ」という言葉は、ここにいるみなさんは意味がわかると思いますが、他の方にはまだ知られてない言葉かと思うので、「マチカツ」を知らない若い人に流行らせるように、先ほどお話をあった Twitter とか LINE とか、そういうもので「マチカツ」という言葉を来年度は広げていったらいかがかと思います。若い人は知らない言葉に敏感なので、短縮言葉で、何の略かわかるようにしていくと、少し興味持ってくれるのではないかと感じます。

[高浦委員長]

庄子委員もおっしゃっていましたが、キャッチャーな言葉を使うことが大切ということですね。体験機会創出のイベントプログラムの名称も、この「マチカツ」という言葉を使いながらでしょうか。「『マチカツ』にようこと」とか、いろいろと言葉を考えられるかと思いました。事務局で事業名称の腹案のようなものは何かございますか。

[事務局（連携推進係長）]

「マチカツ」については、まず若者の目に触れることが大事かと思っていますので、来年度向けの事業募集のチラシ等には、「マチカツ」って言葉をプロットに入っています。また、「マチカツ」という言葉については、今我々もまさに生み出している最中でして、概念というか、考え方というところも含めて今整理しているところであります。今回の調査結果にもあるとおり、「楽しく」とか「人とつながれて」のようなところを説明できるような形で PUSH していきたいと考えております。

[高浦委員長]

ゆるキャラはいかがでしょう。仙台市では作りすぎということもあります。「マチカツ」キャラクターみたいなものを何か。抽象的すぎて難しいですね。

[傳野委員]

「マチカツ」という言葉を浸透させるためには、漢字二文字と片仮名四文字をセットで当分の間使っていただけだとよろしいかと思います。片仮名だけの「マチカツ」だと少し分かりづらいので、漢字と片仮名を当分の間続けて、反応を見るのがいいかと思いました。

[岩間委員]

私も、資料2はわかりやすいと思いました。そのうえで、「情報の届け方の工夫」のところで、今様々なご意見が出していましたけれども、SNS 等ももちろん大切ですが、意外と身近な人たちへの周知広報も大事ではないかと思っています。先ほど説明の中では学校・職場というお話をされていましたけど、さらに例えば、ここに参加している委員の方々が運営する団体とか、中間支援団体とか、商店街振興組合とかにも協力を依頼するのも効果的なのではないかと思いました。

1点、コミュニケーション上で注意が必要なのが親御さんです。まちづくり活動は、全部ボランティアと思い込んでいる方が多いので、コミュニケーションを間違えると、親御さんから反対にあって参加を取りやめるというケースがちらほらあります。報告書の総括で出てきたように、つながりができるとか、キャリア、自分の成長につながるということを強調してコミュニケーションをとる方が、親御さんのご理解を得やすいのかと思います。

また、資料にある「体験機会の創出」がとても大事だと思っています。今回の調査のワークショップの結果を見ても、ほとんどの人が「マチカツ」＝「ボランティア」とか、「マチカツ」＝「サークル」と理解されていますし、実際にそういうケースも多いとは思いますが、この「体験機会を創出」する際には、NPO として取り組んでいるというケースも混ぜつつも、商店街のようにお店の方々が関わって取り組んでいるまちづくりや、ケースは少ないかもしれませんのが株式会社が進めている社会貢献事業もあると思うので、そういうものも体験できる機会にできると、多様なストーリーとか、多様な団体と触れ合う機会が増えて、若い人たちにとっても、「すべてボランティアじゃないなら参加してみてもいいかな」とか、「将来こういう職に就くことを考えてもいいかな」という機会になるのではないかと思いました。

[高浦委員長]

若い人が参加するときは、無償で参加することは結果的には多くなると思いますが、先ほどおっしゃったように株式会社や事業者の取り組みや、商店街をあげてされているとか、すべて無償とは思ってもらわない方がいいということでしょうか。多様な担い手がいるということが伝わると良いと。

[岩間委員]

そうですね。担い手側の目線もそうですし、いろいろな若い人と話すと、まちづくりには興味はなくとも、起業には興味があるという意識が高いタイプの方もいます。会社を起こすといったことに興味がある学生さんも結構いらっしゃるので、そういう経験にもなるということは体験しないとわからないので、そういう要素を少し発信に入れてもいいのかと思ったということです。

[高浦委員長]

将来的なキャリアということを考えても、一つのビジネスパーソンとしての関わりとか、或いは事業性のある団体を立ち上げて、収益を目指しながら街の課題解決をしていくというアプローチもあるでしょうし、こうした多様な道筋があるということの理解で見ると、ボランティアだと抵抗を持つてしまうような若い人たちも参加しやすいですよね。

[佐々木副委員長]

こちらの資料2を拝見させていただきまして、やはり皆さんおっしゃってくださいましたように、体験機会の創出というところが一つ加わったので、活動層に上がっていくための階段、一つ一つのステップが登れるような階段ができたものを感じております。この全体の事業を見て、本当によく考えてくださったと感じております。

そもそもそのところからかもしませんが、このような協働まちづくり推進委員自体に、やはり若者を入れていただきたいと思います。例えば、オブサーバーという形になるかもしれません、この若者施策に関してだけではなく、仙台をどうしていったら良いのか、若者も一市民として、大人と一緒に考える場とすると良いと思います。私たちも知恵をいただくことがたくさんあると思います。特に今は若者のテーマにしているので、若者がいない中での対話というのは、やはり少しどうかと思うところがあります。我々には想像もつかないこともあるかと思いますので、ぜひ今後、協働まちづくり推進委員の中にも、若者がいらっしゃったとしても良いと思いますし、お知恵を借りたいと思っています。

各事業においても、企画運営から若者が参画して、一緒に取り組んでいくことがとても大事ではないかと思っております。私たちの気づかない視点があると思いますし、大切な感覚のようなものを、やはり当事者は感じいらっしゃると思います。そういうものと我々の経験も踏まえながら一緒に作り上げていく。大人から提案するというよりは、一緒に作っていくということが、まさに協働まちづくりにつながっていくのではないかと思っています。

なぜこういうことを思っているかと言いますと、私もNPOをやっていて、ボランティアの方、社会人の方、学生の方もたくさんいらっしゃいますが、SNS等は、完全に大学生に任せています。そうしたら、問い合わせがすごく増えました。使っているのはInstagramですが、私の写真の撮り方と、学生の撮り方と、編集の仕方も全く違って、私には持ちえない感覚があり、一緒に作っていく中で、若い方々からのNPOに対するご意見とか、運営のご意見ももらいます。そうしたところで、ぜひ一緒に、若者だけではなく、多様な世代と一緒にまちづくりをしていくという視点は、当たり前だとは思いますが、改めてお話をさせていただきました。

[高浦委員長]

以前ご紹介したかもしませんが、鯖江市のJK課^{*}みたいに、地域の高校生を集めていろいろな発信を試みてもらうとか、そういうものが、思い切って仙台市もできたらいいなと思います。女子だけに限らなくていいと思いますが。

委員としても、今、年齢制限とかがあるのでしょうか。成人年齢の引き下げで18歳以上であれば委員になれるのでしょうか。

* 地元のJK（女子高生）たちが中心となって、自分たちのまちを楽しむ企画や活動を行う、福井県鯖江市が2014年にスタートさせた市民協働推進のプロジェクト。

[事務局（市民局長）]

この委員会にも若者を入れるという議論は内部でもしておりました。できるだけ実現すべく、先ほど佐々木副委員長からもお話をありましたように、オブザーバーになるのかどうかも含めて検討したいと思います。

また、高橋委員からお話をあったような、例えば、サードプレイスを作るというような話でも、大人が若者のサードプレイスを作つてあげるのか、それとも若者がサードプレイスを作るのかというところもありまして、仙台ですと、五橋に Five Bridge というところや、またその近くではテンポラリー（一時的）ですけども、不安をみんなで吐露する FANTRO BAR（ファントロバー = 不安吐露場）というものを若手の女性がやられていました。そういうところもありますので、我々も今考えている「体験機会の創出」の新規事業のところは、若者に企画運営など任せられないかということも内部で検討しておるところでございます。この委員会も含め、若者がリアルに参加できるというような方策を追求してみたいと思います。

[高浦委員長]

ぜひ、若い世代に委託或いは直接個人で関わっていただくななど、いろいろな仕掛けがあると思いますが、積極的に進めていただければというふうに思います。

[春委員]

情報の届け方の工夫は、いつもすごく悩むところです。少し話がそれるかもしれません、皆さんのお話も聞きながら、認知度の向上という点で、「仙台まちいこ」とか「マイナポイント」などの仙台市や国でやっているポイント事業ですが、私の周りの学生を見る限り、興味がないわけではないのでしょうかけれども、取り組むまでにはいっていない方が多いのが気になります。アプリを入れるとか、どう手続きをするとか、やり方の情報がいってないのか。別に難しいということもないと思うのですが、私の周りの学生は、コンビニでもスタンプをもらえるのに登録していないとか、もう企画が終わりそうな今から始めてしまってスタンプを集められないというようなことを耳にするものですから、先ほど佐々木副委員長からもお話をあつたように、全体に情報発信をするのではなく、ピンポイントで若者にレクチャーして、そこから発信してもらった方が、SNS を使うとか、Twitter を使うにしても、同じ発信方法でももっと広がるのかと思ったところです。見てくれる人は、そこに載っていることを知らないためにアクセスしないということもあるので、その発信元になる、キーになる人に、こちらからピンポイントでアプローチして、そういう発信してくれる人から、学生や若者に発信するツールを作っていくともっと広まりやすいのかと思ったところです。

また、「体験の機会の創出」については、気軽に参加できる点と、企画運営側に若者が参画する点の二本立てという点がとても良いと思います。若者も、気軽に参加したいので縛りがきついものはやりたくないとか、どんどん入り込んで、興味関心が始めて、より深く参画してみたいとか、自分のやりたいことを反映させたいとか、いろいろな方がいます。起業する学生さんは非常に多いと最近思っているところです。本会の会員の方にも、起業した学生さんと地域の活動者が一緒に席を並べる機会、グループワークをする機会があったりすると、地域の方々も刺激になっています。自分と少し違った感覚の方のお話を聞けるというような点で、あえて意図的にそういう機会を設けることによって、普段活動していただいている、基盤を今まで作り上げてきた方々にも、新たな風が吹くことになりますし、若者をもっと受け入れやすい意識が高まってくるのかと思っています。ですので、この体験の機会を上手くコーディネートしていただけたら、非常にありがたいなと感じたところです。

[高浦委員長]

社会福祉分野でも、会社を起こすという若い人たちが出ているということですね。仙台市でも起業を後押しするという事業を経済局が中心となってされていると思いますけれども、そちらともうまくコラボするといいですね。もちろん社会起業ということですと、こういう分野は、もともと関心のある人は多いと思いますが、何か地域の NPO と協働してできるプロジェクトを提案してもらうとか、市民協働の視点でも何か提案できると良いかとお話を聞きながら思いました。起業の支援は岩間委員からもお話をありましたね。

それから、前段のお話ですと、インフルエンサーと言つてもいいでしょうか。そこまで目立

つ人でなくてもいいですけど、若い人なりの目線で発信していくという先ほどの佐々木副委員長のお話にもありました、若者の目線を上手く活用していけると良いですね。

「体験機会の創出」は、若者の関わり方、そして成長できるというところ。ここを前面に押し出しながらできると良いですね。

その他、全体を通していかがでしょうか。

予算取りということもあり、どこまで整理可能性のある提案ができるかというところかと思いますけれども、都市長も随分この分野には関心を持っていらっしゃるようなので、ぜひ市民協働推進課のみなさんには、さらにご活躍いただいて、良い事業をしていただければなと思っております。

それでは、お時間になって参りましたので、議題については、一通り今のところでよろしいでしょうか。非常に活発な議論、ディスカッションができたのではないかと思います。多様な視点で、話題提供、情報提供、またアイディア提供ありがとうございました。

3 その他

[高浦委員長]

それでは、次第3「その他」について、事務局からは特にないようですが、みなさんからは何かございますか。ここで共有すべきことはないでしょうか。特になければ、以上で本日の協議事項報告事項すべて終了とさせていただきます。

進行を事務局にお戻しいたします。

4 閉会

[事務局（市民活動推進係）]

高浦委員長ありがとうございました。最後に市民局長より一言ご挨拶させていただきます。

[事務局（市民局長）]

本日は長時間にわたり活発なご議論ありがとうございました。

今回、若者が活躍するまちづくりということを議論していただいたという根底には、どうしても我々の、今まで若者に対するアプローチが上から目線というか、立派な大人になってくださいというような感じでアプローチしていて、それが果たして本当に正解なのかどうかというところがありました。それは施策の題名とか、そういったものということもあります、もっとディテール（詳細）のところで、例えば案内文を出すときに、やはり役所、サプライサイドの論理が出て、楽しいなんてことは一言も書いていなくて、「立派な大人になりましょう」みたいな形でやっていたというところが非常に反省としてございます。今年度、この調査をして、それが裏付けられたような形になっていますので、先ほどの議題2で、来年度の施策の方の展開ということをご説明させていただきましたが、施策を展開する我々が若者と同じ目線で取り組んで参りたいと考えております。本日の様々なご議論も、そういった文脈でしっかりと生かしていきたいと考えております。

来年度につきましては、従前から申し上げている通り、学都、支店経済と言われるよう、そういう若者が多いところを生かした取り組みを展開して参りたいと思います。

皆様におかれましては、今年度、本当にありがとうございました。来年度も引き続き、市民協働のまちづくりについてご議論、そしてアドバイスをお願いできればと考えております。

1年間ありがとうございました。

[事務局（市民活動推進係）]

以上をもちまして、令和4年度第4回仙台市協働まちづくり推進委員会を閉会いたします。来年度の日程につきましては候補日が決まりましたら、改めてご連絡させていただきますの

で、よろしくお願ひいたします。本日はお疲れ様でございました。一了一

〈議事録署名人〉

[委員長] 高浦 康有

[署名人] 小林 幸司

